売茶翁と大潮元皓

馬　　叢　　慧

目　次

はじめに
１．龍津寺の住職
２．「送賣茶翁再游洛序」
３．「和売茶口占　贈通仙亭主翁十二首」
おわりに

はじめに

売茶翁（1675–1763 年）は、一般的に煎茶や煎茶道の「中興の祖」として知られている人物である。本名を柴山元昭、法名を月海と言い、肥前国蓮池[1]の人である。彼は 11 歳で蓮池にあった龍津寺に入門し、黄檗宗[2]門下の化霖禅師[3]に師事することとなり、壮年時代までを黄檗僧として過ごした。その後上京し、京都で煎茶を売る生活を始め、京都の東山では「通仙亭」[4]と名付けた茶亭を設け、京都の名所で茶を売る風流な生活を過ごした。その後、68 歳で還俗し、名前を高遊外に改め、以後 81 歳まで、京都で茶を売り続けた。

大潮元皓（1676–1768 年[5]）は、黄檗宗の僧であり、俗姓は浦郷である。道号が大潮であり、月枝・魯寮・西溟・泉石陳人とも号した。肥前国伊万里の出身で、16 歳の時に売茶翁と同じ龍津寺に入り、化霖禅師に師事したので、売茶翁の法弟にあたる。大潮は仏教のほかに、多方面の学問も修め、詩文にも優れた。『西溟餘稿』、『魯寮詩偈』、『松浦詩集』など多くの文集を残しただけでなく、荻生徂徠や服部南郭など、多くの文人との交流もあったことから、これまでの先行研究も多岐にわたる人物である。

売茶翁と大潮元皓は、近世の文人の研究において、極めて重要な存在であるとともに、とりわけ売茶翁の交友関係に関しては、大潮が特に関係の深い人物であったことから、これまで先行研究でも取り上げられてきたテーマである。しかし、売茶翁と大潮は同門の兄弟弟子という立場での関係性が指摘される一方で、その関係性の分析は十分になされていないのが実状である。両者の師である化霖禅師が亡くなった後に、大潮が龍津寺を継ぎ、売茶翁が京都で売茶生活を始めて以降も、売茶翁と大潮とは書簡や漢詩の交流を絶えず行った記録があることからも、売茶翁という人物を知る際に、大潮の存在無くして深い考察を行うことは困難であると言っても過言ではない。

本稿では、売茶翁の交友関係の一環として、大潮の『魯寮文集』に残る「送賣茶翁再游洛序」を通じて、二人の関係と、大潮の売茶翁に対する理解の深さを読み取るとともに、売茶翁の残した「売茶口占十二首」に対して、大潮が次韻した作品「和売茶口占贈通仙亭主翁十二首」に着目し、大潮と売茶翁との関係を具体的に考察したい。

なお、「送賣茶翁再游洛序」は『魯寮文集』（1745 年刊、国立国会図書館蔵本）、「売茶口占十二首」は『売茶翁偈語』（大正 14 年刊、国立国会図書館蔵本）、「和売茶口占　贈通仙亭主翁十二首」は『魯寮詩偈』（若木太一氏蔵本）を基礎資料とした。

1．龍津寺の住職

売茶翁は 22 歳から 10 年あまり行脚修行をし、大潮も 21 歳の時から、時々遊行に出ており、二人とも龍津寺にいない期間は多かったが、それまでは共に龍津寺で過ごしたと思われる。師の化霖の没後、大潮が龍津寺の住持となるが、従来の売茶翁研究においては、売茶翁自身が龍津寺の住職になることを放棄し、大潮を推薦したと考えられる傾向にあった。これは、おそらく両者と交友した大典顕常（1719–1801 年）[6]の「賣茶翁傳」[7]にある「霖没擧法弟大潮主之」からの推測であり、売茶翁自身が住職になるこ

とを拒否し、法弟大潮を住職として挙げたと考えたのであろう。

しかし、一方では、売茶翁と大潮、どちらが住職になるべきなのか、その才能について比較しようとする研究もあった。谷村為海氏は『高遊外売茶翁』(1981年)において、大潮について以下のように述べた。

「(大潮は)享保三年の夏には、師の化霖に「遠大なることをせよ。近小なることはやめよ。竜津寺は小刹で、われの余年を終わらしめるものは月海で、棺を斂めてくれるものには鏡宗[8]がいるから」と、激励されて佐嘉を出たのだ、などと、いろいろ理由を設けて、寺を継ぐことを拒みつづけた。」[9]

谷村氏による化霖の言葉の出典がどこかを知る術はないが、少なくともこの内容から、月海(売茶翁)より大潮が優れた才能の持ち主として、龍津寺のような小さな寺に縛られてしまうことがもったいないという意味を読み取ることができよう。

また、『江戸漢詩選第五巻　僧門』の「解説」においても、次の様に述べられている。

「(売茶翁)当然その後を継ぐべき立場であったが、翁はかたくなにそれを拒み、法弟の大潮元皓を呼び戻して後を継がせようとした。大潮は当時自由な立場で文人として活躍していたから、寺に縛られることを嫌ってなかなか戻らず、結局享保七年(一七二二)彼が戻って寺を継ぐまで、翁が寺務を司どった。

こうした翁の前半生を見ると、むしろ非常に生まじめな性格がうかがわれ、後半生の自由人としての生き方にそぐわないような感がする。だが、その生まじめさゆえに、禅の指導者としての自らの資質の限界を知り、その資格がないのに安閑と寺の食を食むことを自ら許すことができなかったのである。」[10]

ここでは大潮が「自由な立場で文人として活躍していた」から、龍津寺の住職になることに縛られたくないとしているに対して、売茶翁は「禅の指導者としての自らの資質の限界を知り、その資格がないのに安閑と寺の食を食むことを自ら許すことができなかった」とあるように、売茶翁が住職になることを拒否する原因の一つとしてあげている。

ともあれ両者が龍津寺の住職を拒否する理由について、詳しい資料は残されていないが、大潮が書いた「寶壽開山化霖和尚行業記」[11]には以下の記述がある。

「弟子若干人。傳法者如湖等僅十数人。而若晧與昭輪次奉師。自師身退甘露之院至示寂十有八載。云晧嘗辭師即五年於外。今而来歸。師寂忽大祥矣。元昭摂院事奉師臨末。亦能状師事実也。足其所状之意。使晧文師出處。晧不肖者。忍文邪。又禮弗可避。乃拝稽首記師行業。」

(弟子を度すること若干人、法を伝うる者の湖等の如き、僅かに十数人、皓と昭とが如き、輪次して師に奉せり、師の身甘露之院に退きし自り、示寂に至るまで十有八載なり、云うらく皓嘗て師を辞し、即ち外に五年、今に師寂して来り帰る、忽ち大祥となる、元昭かねて院事を摂り、師の臨末に奉し、亦能く師の事実を状する也、其の状する所の意を足して、皓をして師の出処を文せしむ、皓は不肖なる者の、忍んで文せんや、又礼避くべからず、乃ち拝稽首して師の行業を記す)

ここでの「大祥」は葬後二十五カ月で祭ること。すなわち、この行業記は化霖が亡くなってから二年後に書かれたものである。この文から、化霖に法を得た人は十数人いるが、大潮と売茶翁は順番に化霖に仕えたというのである。化霖が龍津寺の甘露院に隠居してから亡くなるまでの十八年間、大潮はよく師の元を離れ、遊学に出たが、最後に離れてから五年が経ち、戻ったのは化霖の二回忌の時であった。さらに、大潮がいない間、元昭(売茶翁)は寺務をしながら化霖の臨終時の世話し、その時のことを書状にしたとある。その書状により、大潮が化霖の行業を書くこととなったのである。つまり、売茶翁と大潮、各自に龍津寺を継ぎたくない理由があったのかもしれないが、化霖は臨終の時に遺言を残し、その遺言によって、大潮が龍津寺を継ぐこととなったのである。

このように売茶翁が大潮に及ばず、龍津寺の住職を拒んだという理由を推測されたものも存在したが、大潮自身が売茶翁を「同門之最」とし、売茶翁に対して非常に尊敬していた記述もある。そのような売茶翁と大潮の実際の関係については、以降でより深

く考察していく。

2.「送賣茶翁再游洛序」

「送賣茶翁再游洛序」は、売茶翁が67歳で故郷の佐賀に帰り、還俗して再び京都に戻る時に大潮が書いたものだと思われる。全文で800字程度の漢文であり、大潮の『魯寮文集』に収録されている。管見の限りでは『佐賀県郷土史物第一輯　脊振山と栄西；大潮と売茶翁』(1974年）においてのみ、資料として活字化され、いくらか注釈されているが、詳しい分析はなされていない。

「送賣茶翁再游洛序」は、売茶翁が佐賀から京都に戻ろうとする時、旧知の人物が売茶翁に京都で茶を売る理由についての問いかけに対する、売茶翁と大潮の会話の記録であり、売茶翁を理解する上では、非常に重要な資料である。なお、問いかけた人については「人或問翁者」と書かれたのみで、内容からは架空の人物の可能性があると思われる。

さて、序の最初は、大潮の売茶翁についての評価から始まる。

「曰賣茶翁之在洛也。雖其無以自給乎。然不欲求於外。故游非其方不従。交非其人不接焉。唯以其鬻茶。故名徧五幾。然五幾之所以知賣翁。又奚盡哉。」
（曰、売茶翁の洛に在るや、其れ以て自給する無しと雖も、然も外に求ることを欲せず、故に游其の方に非ざれば従わず、交わりその人に非ざれば接せず、唯其の茶を鬻ぐ故を以て、名は五畿に徧き、然も五畿の売翁を知る所以、又奚（またなん）ぞ尽さんや）

「方」は、『荘子』大宗師篇に、「孔子曰、彼遊方之外者也、而丘游方之内者也。」と「方外」、「方内」とあり、成玄英の『荘子疏』では、「方、區域也。」と「方」を解釈している。つまり、区域、区劃の意味である。「五幾」は、幾内の五つの国、山城、大和、河内、和泉、摂津の五国の総称である。

ここでは、売茶翁が京都において茶を売り、自給できなくても、人に頼ることなく、自分の志に合わない道に進むことなく、趣が合わない人とは接していないことが分かる。また、売茶翁が還俗する以前に、既に京都を中心とした地域で有名になっている様子を窺うことができる。

続いて、大潮はさらに、売茶翁について次のように説明している。

「翁去郷里之十年。而展其師親墓来歸。獲復與元皓相歡以及明年之春。賣翁之意。無為乎郷。無為乎郷者無執乎郷。則乃知其為無執乎郷者。為無執乎世者已。不其大哉。」
（翁郷里を去ることの十年にして、其の師親の墓を展して来たり帰り、復た元皓と相歓することを獲て、以て明年の春に及ぶ、売翁の意郷に為すこと無し、郷に為すこと無きは、郷に執ること無ければなり、則乃知る其の郷に執ること無しと為するは、世に執ること無しと為るは、已に其の大ならずや）

ここで売茶翁は、故郷を離れて十年、亡くなった師の化霖の墓参りで帰ってきており、大潮と会うこともできたとあるので、売茶翁が67歳に故郷に帰り、還俗した時のことであることがわかる。売茶翁は還俗して、再び佐賀を離れることを大潮に伝えたようで、大潮は売茶翁が再び故郷を離れることを「賣翁之意。無為乎郷。無為乎郷者無執乎郷。則乃知其為無執乎郷者。為無執乎世者已。不其大哉。」とし、すなわち売茶翁は故郷に対して執着を持たない人であるため、世の中にも執着を持たず、これこそ「大」なる人だと絶賛しているのである。

しかし、その偉大な売茶翁は、大潮の敬意同様には周囲から理解されていなかったようで、京都に戻ろうとした時、「居亡何。賣翁復将之洛。於是親戚故舊懼往。而不返也。計欲留之竟不可得。」（居ることいくばくも亡くして、売翁復た将に洛に之かんとす、是に於て親戚故旧往きて返らざらんことを懼るるや、計りて之を留めんと欲す、竟に得るべからず）と親戚などが売茶翁を故郷に引きとめようとした。そして、売茶翁に対して、問いかける人まで登場したのである。

「人或問翁者曰。今翁之意無執乎世。而猶所執乎洛耶。夫人生一世間。各有所事事。拘拘乎。役役乎。不能知其所休已。第如翁者則郷與洛又奚擇焉。孔子不云何陋之有。今翁所有者。豈獨其茶耶。又奚以之洛而賣為。翁不答乃顧余而笑。」
（人翁に問う者或りて曰く、今翁の意世に執ること無し、而して猶お洛に執る所あるがごとし、夫れ人

一世間に生まれて各々事を事とする所あり、拘拘と役役と、其の己を休する所を知ること能わず、第翁の如きは則ち郷と洛と又奚ぞ択ばん、孔子云わずや、「何の陋しき之有らん」と、今翁の有する所は、豈独りの其の茶のみならんや、又奚ぞ以て洛に之きて売ることを為さん、翁答えず、乃ち余を顧みて笑う）

「拘拘」は、まがって伸びない様。『荘子』大宗師篇に「嗟乎、夫造物者、將以予爲此拘拘也。」とある。「役役」は、労役して休まぬ様子。『荘子』斉物篇に、「終身役役、而不見其功。」とある。「何陋之有」は、『論語』第九に、「子欲居九夷、或曰、陋如之何、子曰、君子居之、何陋之有。」と出典があり、君子がそこに居住すれば文明や学問の教化が自然に進む、と故郷を「九夷」に喩えたのである。

これは売茶翁のような世の中に執着を持たない人が、どうして故郷より京都を選択し、またどうして茶を売ることにしたかについての問いかけであった。さらに、荘子の言葉「拘拘」と「役役」、孔子の言葉「何の陋しき之有らん」を借りて、茶という物に拘り、京都のような場所に拘りすぎるべきではないと売茶翁にあてこすろうとして問いかけたのである。売茶翁はこれに対して答えず、ただ大潮を見ながら微笑むだけであった。

「又問。昔如来非夫自覺以覺他。出世以遂懐四十九年以賣所有於群類者乎。至若諸代列祖鳴鐘擊鼓。其所有何適而弗為。是以臨濟以喝。德山以棒。石鞏以彎弓。不一而足。若夫孔老世之聖者也。老子曰。良賈深藏。孔子曰。求善賈而沽諸。此亦有之至也。而彼且奚適。今翁所有者。豈獨其茶耶。又奚以之洛而賣為。雖然人各有所好。物各有所托。今翁所為豈托與。翁於是益笑。問者茫然。少焉。乃出。」

（又問う、昔如来は夫の自覚して以て他を党し、世に出て以て懐を遂げ四十九年、以て所有を群類に売る者に非ずや、至るに諸代列祖鐘を鳴らし、鼓を撃ち、其の有する所いずこに適くとしてか、是を以て臨済は喝を以てし、德山は棒を以てし、石常は弓を彎くを以てす、一にして足らず、夫の孔老の若きは、世の聖なる者なり、老子の曰く「良賈は深く蔵す」孔子の曰く「善き賈を求めて諸を沽らん」、此れ亦有するの至りなり、而るに彼且に奚くに適かんとす、今翁の有する所は、豈独り茶ならんや、又奚ぞ洛に之を以て売ることを為さん、然りと雖も人各好む所有り、物各托する所有り、今翁の為する所、豈托するが為か、翁是に於いて益笑う、問う者茫然たり、少して乃ち出ず）

「臨濟以喝」、「臨濟」は臨済義玄（？-867年）、中国の禅僧で臨済宗の開祖。「喝」という怒鳴る禅風である。「德山以棒」、「德山」は德山宣鑑（780-865年）、棒を使って修行者に指導することで、「臨済の喝、德山の棒」として有名である。「石鞏以彎弓」、「石鞏」は唐代の石鞏慧藏が弓を張って来者に向かったのがその禅風である[12]。「良賈深藏」は、賢い商人は良い品物を持っていても店頭に並べたてず店の奥深くに収蔵する。本当に学識がある人は人前にひけらかさないことを喩える。『史記』老子韓非列伝に、「良賈深藏若虚、君子勝德、容貌若愚。」とある。「求善賈而沽諸」は、美玉は良い買い手に売るべきである、つまり自分の学識を認めてくれる人を待つことを指す。『論語』子罕に「子貢曰。有美玉於斯。韞匵而藏諸。求善賈而沽諸。子曰。沽之哉。沽之哉。我待 賈者也。」とある。

それでも売茶翁が答えないため、質問者はさらに問いかけたのである。如来が四十九年をかけて説法、禅宗は鐘を鳴らして鼓を撃ち、臨済は喝、德山は棒、石鞏は弓によって禅の示し方が違うことを言及し、質問者は佛教、特に、禅宗に詳しい人物であることを窺うことができる。また、老子の「良賈は深く蔵す」、孔子の「善き賈を求めて諸を沽らん」の言葉を借りて、売茶翁が自己顕示すべきではないと主張しているのである。

さらに、文中の「此亦有之至也。而彼且奚適。」（此れ亦有するの至りなり、而るに彼且に奚くに適かんとす）は、『荘子』逍遥遊篇の「此亦飛之至也。而彼且奚適也。」（此れ亦た飛ぶの至りなり、而るに彼且に奚くに適かんとするや）[13]から引用したと思われる。これは『荘子』逍遥遊篇においては、斥鴳（うずらのような小鳥）が鯤（大鵬のような大鳥）を嘲笑った言葉であり、「此小大之辯也」（此れ小大の弁なり）[14]という、斥鴳には鯤の志を分かるはずがないと表す言葉であった。質問者は荘子の言葉を借りて、売茶翁が茶を売ることは、禅の列祖、老子や孔子のような先哲たちの境地まではたどり着けないであろうと厳しく問い詰めたのである。

最後に、「雖然人各有所好。物各有所托。今翁所為豈托與。」（然りと雖も人各好む所有り、物各托する所有り、今翁の為する所、豈托するが為か）と、売茶翁は茶を売ることに託しているのかと質問した。ちなみに、「人各有所好」は、白居易の詩「鶴」の「人各有所好、物固無常宜」を、「物各有所托」は、陶淵明の詩「感士不遇賦」の「萬物各有托、孤雲獨無依」を思わせる句である。

ここで売茶翁に問いかけた内容を見てみると、質問者は一般の人ではなく、中国古典については、かなりの素養の持ち主であった。興味深いことに、質問者が知識をひけらかして、売茶翁を論破しようとしたのに対して、売茶翁は終始微笑んだだけで、答えようとしなかったのである。

質問者は売茶翁の答えを得られず、しばらくして立ち去って後に、売茶翁と大潮の会話が始まるのである。

「余與翁相謂。凡今之人所同欲得者。最莫過利。而名次之。利之所以欲得於己者。最莫過今人之不由道。而衒其名以釣。然彼急其得於名。而降焉者急其得於利。利之與名。崇卑雖殊。均之急於得者也。然則前所謂不由道者。即其所得。固自不能酬其所欲也。」（余翁と相謂えらく、凡して今の人同じく得んと欲する所の者、最も利に過ぐることなし、而して名之に次ぐ、利の己に得んと欲する所以の者、最も今の人の道に由らずして、而して其の名を衒いて以て釣るに過ぎたることなし、然りといえども、彼は其の得ることを名に急にす、而して降れる者は、其の得ることを利に急にす、利と名と崇卑殊なりと雖も、均しく之得るに急なる者なり、然るときは則ち前に所謂る道に由らざる者、即ち其の得る所あるも、固より自ら其の欲する所に酬うること能わず）

「名利」は名誉と利益、功名と利禄。『戦国策』秦策に「張儀曰、爭名者於朝、爭利者於市。」とある。

ここで、売茶翁は客の問いかけに対して答えなかったが、大潮に対しては口を開いたのである。売茶翁は「名利」について、当時の「不由道」（正当な方法を守らない）の人は、利益のために名誉を欲しがり、名誉を手に入れても、その欲に満足させることがないと批判した。これに対して大潮は、次の様に言った。

「元皓曰。嗟名利哉。得亦有道焉。故古之由道者。其於名利亦稍不期而集。豈自衒容致哉。且名利之於人。莫大於有天下也。而舜之所以有天下。豈可期乎。故曰舜有天下而弗與焉。我佛世尊。初棄金輪寶位。而脱屣名利。由是觀之今為佛子。雖王天下非貴也。況世之瑣瑣者何足道哉。而今之人上者名而自釣下者利。而莫知其足。遑遑焉汲汲焉。終身於囁嚅伺候之間。了不知其名利之去道。而非我有也。甚矣。名利之害道也。夫以釋焉而得。儒焉而得。雖有能不害乎我者。幾希也。獨賣翁以其鬻茶。故名徧五幾。然五幾之所以知賣翁。又奚盡哉。乃今或以其所有問焉。斯不知翁者也。而又不知其茶者也。猶且欲其有言。即醜大於世。急名利也。嗟翁信能賣哉。」

（元皓が曰く、嗟（ああ）名利なるかな、得るも亦道有り、故に古の道に由る者、其の名利に於いて、亦稍期せずして集まる、豈自ら衒いて致すを容れんや、且名利の人に於ける天下を有するより大なるはなし、而して舜の天下を有する所以、豈期す可きや、故に曰く舜天下を有し、与らずと、我が仏世尊初め金輪宝位を棄て、而して名利を脱す、是に由りて之を観れば、今払子為る者、天下に王たりと雖も貴に非ず、況や世の瑣瑣（ささ）たる、何ぞ道うに足らんや、而るに今の人上なる者は名にして、以て自ら釣り、下なる者は利にして、其の足ることを知ることなし、遑々たり、汲々たり、身を囁嚅（しょうじゅ）の間に終わり、了（つい）に其の名利の道を去りては我が有に非ざることを知らず、甚だしきかな、名利の道に害ある、夫れ釈を以てしかも得る、儒にしてしかも得る、能く我を害せざる有ると雖も、機希なり、独り売翁其の茶を鬻ぐの故を以て、名五幾に徧し、しかも五幾の売翁を知る所以、又奚ぞ尽くさんや、乃ち今或（人）其の所有を以て問う、斯れ翁を知らざる者なり、而して又其の茶を知らざる者なり、猶お且つ其の言有らんことを欲す、即ち醜きこと世に大なり、名利に急するなり、嗟翁は信とに売ることを能するかな）

「弗與」は与えないの意味。『韓非子』説林上に「因索地於趙、弗與、因圍晉陽。」とある。「瑣瑣者」は計謀の狭く浅い者。『爾雅』釋訓疏に「舍人曰、瑣瑣、計謀褊淺之貌。」とある。「遑遑焉」は忙しく、落ち着かないさま。『魏志』文帝紀に「洙泗之上、悽悽焉、遑遑焉。」とある。「汲汲焉」は忙しいさま、

せわしく努めるさま。『禮記』問喪に「望望然、汲汲然、如有追而弗及也。」とある。「囁嚅」は臆病で、口を動かすだけで、はっきり物を言えないの意味。韓愈の「送李愿歸盤谷序」に「口將言而囁嚅。」とある。「伺候」は狙いうかがうの意味。『呉志』全琮傳に、「伺候不休。」とある。

大潮は「名利」について売茶翁と同じ意見を示し、さらに最も大きい「名利」としての「天下」を例にして、「舜」や「我佛世尊」は自ら天下を望んだのではなく、天下を手に入れても、それを利用して「利」を得ようとしていない。しかし、今の「名」を利用して「利」を得ようとする世俗の人は、満足することを知らず、「名利」を求めることが「道」に反することを理解していないと厳しく批判したのである。そして、売茶翁について、その名が五幾に広がっても、売茶翁を本当に理解する人がおらず、売茶翁に質問したような人は、売茶翁を知らない人、売茶翁の茶を知らない人だと嘆いたのである。このように売茶翁と大潮とが語らったのは、茶という行為に留まらず「名利」についてまでの意見も交わしていたこととなる。

大潮の「送賣茶翁再游洛序」を通して、当時一般的に、売茶翁は「名」を求めるために京都で茶を売っていると思われていた背景が窺えるのである。また、売茶翁は最後まで質問に答えることなく、京都で茶を売ることに対して、理解を求めていなかった。大潮は一般の人と違って、売茶翁の思いを深く理解し、売茶翁の思想や精神は名利を追求する人に理解できるものではないと代弁したのである。これについて、「序」の最後に、「翁曰。詩云人之有心。吾忖度之。吾子之謂也。吾其行哉。吾子必將継吾廼行。」（翁の曰く、詩に云く、「人の心有る、吾之を忖度する」は、吾子が之謂いなり、吾其れ行かんかな、吾子必ず将に我に継がんと欲す、廼ち行く）とあるように、売茶翁自身も、世間一般的にどう思われているかを「人の心有る、吾之を忖度する、吾子が之謂いなり」と大潮の言うことを肯定し、それでも「吾其れ行かんかな」と京都に戻る決意を表したのである。

これまで見てきたように、売茶翁の茶の真意について語られている記録はほとんどない中で、「送賣茶翁再游洛序」は、その一端に触れる貴重なものであると言えよう。と同時に、売茶翁が大潮の洞察力に感銘しきりであった点などが、大潮こそが売茶翁の真の理解者（知己・知音）に限りなく近い存在であった証左とも言えよう。

3.「和売茶口占　贈通仙亭主翁十二首」

売茶翁は売茶生活を始めてから亡くなるまで、百首近い漢詩を残している。「売茶口占十二首」は、その中の代表的な作品である。「口占十二首」は、すべてが七言律詩であり、題目通り、十二首からなる。作られた年代は不明であるが、『江戸漢詩選第五巻僧門』では、大潮の「和売茶口占　贈通仙亭主翁十二首」（1738 年頃）と「和売茶翁卜居作却寄三首」の作成年代から、売茶翁が茶を売り始めて間もない頃（1735 年頃）の作品だと推定しており、「卜居三首」も同時期の作品だと考えられる[15]、とある。つまり、売茶翁が京都で茶を売り始めた頃の作品である。これはおそらく、大潮の次韻「和売茶口占　贈通仙亭主翁十二首」が収録されている『魯寮詩偈』の年代順から推測されたものであろう。

「売茶口占十二首」が作成された時期は、売茶翁が京都で売茶生活を始めて間もない頃でもあり、売茶翁を知る人はそれほど多くはなかった時期である。「送賣茶翁再游洛序」からも分かるように、その売茶行為を珍しくは思っても、売茶翁の隠遁の背景にある思想や、真の売茶の目的を理解する人もそれほどいなかったと思われる。

そのような中で、同門の大潮は、売茶翁の活動の賛同者として、売茶翁の「口占十二首」と「卜居三首」に対して次韻をし、売茶翁を積極的に支持した様子がうかがえる。とりわけ「和売茶口占　贈通仙亭主翁十二首」においては、単に次韻したもののみでなく、売茶翁の詩の内容や込められた気持ちを巧みに汲み取り、機転を効かした詩を作った大潮の優秀さも垣間見ることができるのも興味深い。

以下では、売茶翁と大潮の詩の題名を略して、順番通りに並べ、主に大潮の次韻「和売茶口占　贈通仙亭主翁十二首」を解説し、売茶翁と大潮の関係を具体的に読み取っていきたい。

第一首

【売茶翁】

　　将謂傳宗振祖風　将に謂えり、宗を伝え祖風

を振うとし
却堪作箇賣茶翁　却って堪えて、箇の売茶の翁となる
都来榮辱亦何管　都来の栄辱、亦た何ぞ管せん
收拾茶錢賑我窮　茶銭を収拾し、我が窮を賑わす

「禅宗を伝え、開祖の教えを賑わせようと思っていたが、逆に売茶する翁になってしまった。すべての栄辱にどうしてとらわれようか。茶代を集めて、私の困窮に充てている。」

【大潮】

河上湘簾揺午風　河上の湘簾、午風に揺ぐ
賣茶却勝住山翁　売茶は却って住山翁に勝つ
生涯但有長流水　生涯但だ長流水有り
逝者如斯趣不窮　逝く者は斯の如きか、趣窮らず

「河のほとりの簾が、昼間の風に揺れる。茶を売るのは山に住む翁、つまり寺の住職に勝っている。人生にはただ長い川を流れる水があるだけだ。過ぎ去って行くのは川の流れのようだ、趣が尽きない。」

大潮は売茶翁の詩に対して、「風」、「翁」、「窮」の韻を合わせている。「湘簾」は竹のすだれ、湘は湘竹のことであるが、ここでは売茶翁の茶店にかかる旗を喩えたのだろうか。宋の范成大の詩「夜宴曲」には「明瓊翠帯湘簾斑」とある。「逝者如斯」という表現については、『論語』子罕篇「子在川上曰、逝者如斯夫。不舍昼夜。」とあり、「子、川の上に在りて曰わく、逝く者は斯くの如きか、昼夜を舍てず。」という有名な句である。これは、「過ぎ去る者は、すべてこの川の水の如くであろうか。昼も夜も、一刻の止むときなく、過ぎ去る。人間の生命も、歴史も、この川の水のように、過ぎ去り、うつろってゆく」という悲観的な解釈がある。

一方、宋の程伊川の注では、「此道体也。天運而不已、日往則月来、寒往則暑来、水流而不息、物生而不窮、皆与道為体、運乎昼夜、未嘗已也。」[16]宋儒の新注は、この章をもって楽観の言葉とし、世界の間断なき運動、その象徴を孔子が川の水に見たとしている。吉川幸次郎は、宋儒がこの『論語』の一章は、世界の本質を指摘したとして「此れは道の体也。天は運りて已まず。日往けば則ち月来たり、寒さ往けば則ち暑さ来たる」、世界の本質は無限の循環である。ゆえに「水は流れて息まず、物は生じて窮まらず。皆な道に与いて体と為り、昼夜に運りて未だ嘗て已まざる也。」要するに世界の本質は、無窮の運動にある。「昼も夜も一刻も停止することのない宇宙の活動は、この川の水によってこそ示される。それは無限の持続であり、無限の発展である。人間もまたそうした持続、発展の中にいる。」という積極的な解釈をしている。[17]

大潮は、この句ではおそらく「逝者如斯」を積極的な意味に取り、人間の生涯は川の流れのように過ぎ去るものであっても、売茶翁の風流は川の流れのように永遠に止むことがないとしている。川辺にかかる旗が午後の風に揺れ、売茶の生活は住職よりずっと素晴らしいという様に、大潮は売茶翁の売茶生活を風流に描き、黄檗僧のままでいるよりはずっと良かったのだと肯定し、むしろ大潮はその生活ぶりを羨ましがっているようにも読み取れるのである。

また、第一首において、売茶翁が「收拾茶銭賑我窮」と「困窮」の意味で用いているのに対して、大潮は「逝者如斯趣不窮」と「趣に窮まりが無い」と表現し、同じ「窮」という字を使いながらも、貧しさという意味をどこまでも風雅であるという意味に置き換えているのが印象的である。

第二首

【売茶翁】

茶亭新啓鴨河濱　茶亭新たに啓く、鴨河の濱
坐客悠然忘主賓　坐客悠然と主賓を忘れる
一盌頓醒長夜睡　一盌頓に醒む、長夜の睡
覺来知是舊時人　覚め来たりて知る、是旧時の人

「鴨川のほとりに新しく開いた茶店では、客も悠然として主賓の立場を忘れてしまう。一杯の茶で直ちに長い眠りから目を覚まし、目覚めて以前のままの自分であることを悟る。」

【大潮】

石爐瓦鼎傍河濱　石爐瓦鼎、河濱の傍ら
問月従風何處賓　月に問い、風に従い、何處賓なるか
但使茶香能透腑　但(ただ)茶の香をして、よく透腑

すれば
相逢誰不個中人　相逢う、誰が個中人ならずや

「風炉は河の傍らにあり、月に聞いたり風任せにしたりするが、一体どこに客がいるのだろうか。ただ、茶の香りが心身を通り抜けると、誰もがこの奥深い存在であることに気づく。」

ここでは、大潮は売茶翁の詩の「濱」、「賓」、「人」の韻に合わせている。石爐瓦鼎は、風炉と茶釜のこと、風爐瓦鼎ともいう。宋・羅願の詩にも「岩下才經昨夜雷、風爐瓦鼎一時來」とある。「透腑」は腑臓に浸透する意味である。「相逢」は、あい逢うこと。唐・白居易 の「琵琶行・并序」では「同是天涯淪落人、相逢何必曾相識」とある。また、唐・杜甫の「長沙送李十一銜詩」では、「與子避地西康州、洞庭相逢十二秋」とある。「個中人」はこの中の人。宋・蘇軾の「李頎秀才善畫山 以兩軸見寄 仍有詩 次韻答之」に「平生自是個中人、欲向漁舟便写真」とある。禅語では、奥深い道理を理解できる人とする。

売茶翁は、喫茶を通じて、肢体や是非など、あらゆる差別を忘れる境地に至り、自由自在に遊する、という至高な生き方を二首で表現していた。当然大潮にはそれを読み取れていないはずがない。大潮は、次韻の最初の二句「石爐瓦鼎、河濱の傍ら　月に問い、風に従い、何處賓なるか」で、売茶翁の茶をどこまでも風流に描いている。三句目の「但茶の香をして、よく透腑すれば」は、売茶翁の強い願望は、茶を通してしっかり伝わり、これを飲んだ人は、「相逢う、誰が個中人ならずや」のように、必ずその生き方の奥深さを理解できるだろうとしたのである。

第三首

【売茶翁】

頻喚喫茶効趙州　頻(しき)りに喫茶を喚(よ)び、趙州に効う
千年滞貨没人求　千年の滞貨、求る人なし
若能一口喫過去　若し能く一口に喫過き去られば
萬劫渇心直下休　萬劫の渇心、直下に休す

「喫茶をしきりに叫んで、趙州和尚を真似する。長い間の売れ残りを欲しがる人もいない。もし一杯のお茶を飲めば、長い間の心の渇きもたちまち癒してしまう。」

【大潮】

一従滄海出西州　一たび滄海より西州に出で
竟是青山無所求　竟是、青山求むる所無し
春水日烹三五度　春水、日に烹ること三五度
人間何處不堪休　人間何処に休むに堪えざらんや

「一たび九州を出ると、終の住処を求めず、雪解け水で一日に再三再四、茶を煮る。世間のどこでも休むことはできるだろう。」

大潮は、売茶翁の第三首の「州」、「求」、「休」の韻に合わせている。「一従」は「～から」の意味。唐・王昌齢の「寄穆侍御出幽州」には、「一従恩遣度瀟湘、塞北江南萬里長」とある。「滄海」とは、大海原とともに仙人の住む島を示すこともあり、西州は西海とも呼ばれ、九州地方を示す。「三五度」は、何回かの意味。「青山」は本来青々とした山の意味だが、墓の意もある。蘇軾の詩「予以事繫御史臺獄云云遺子由詩」には「是處青山可埋骨」とある。宋・月性の詩「将東遊題壁詩」に「埋骨豈惟墳墓地、人間到處有青山」とある。「春水」は、春の川水。唐・杜甫の「遣意」に「一径野花落、孤村春水生」とある。「不堪」は、甚しい、ひどい意味もあるが、ここではできないという意味である。南朝梁・陶弘景の「詔問山中何所有・賦詩以答」に、「山中何所有、嶺上多白雲、只可自怡悦、不堪持贈君」とある。「休」はやすむ。『説文』には、「休、息止也、従人依木」とある。ここではそれをさらに、反語的に表現している。

売茶翁が何歳から佐賀を出たかについての明確な記録は残されていないが、この詩では「売茶口占十二首」を書くまで何年も経過していることが分かる。売茶翁が龍津寺を大潮に托し佐賀を離れる際に、戻らない決心を大潮に伝えていたかのように、大潮は「一たび滄海より西州に出で、竟是、青山求むる所無し」と表現している。このことから推測すれば、この詩を通して売茶翁には今後佐賀に戻ることを求めていないかのような信念を感じることができる。

売茶翁は安定した生活を求めることもなく、毎日茶を煮て、気が向くままに世間を渡り歩く生活をしている様子を、大潮は第三首の次韻で表したのであるが、結果として売茶翁は、通仙亭を開いてから体

調が悪化する81歳まで煎茶を売り続け、亡くなった後も本人の意志によって、墓に埋められることなく、鴨川に遺骨を流したのである。そのような売茶翁の生涯を踏まえると、大潮の第三首は大潮こそが売茶翁の第一の理解者であったことの証左ともなるのではなかろうか。

第四首

【売茶翁】

身老殊知吾性拙　身老いて、殊に知る吾が性の拙きを
旧交尽是占機先　旧交は、尽く是れ機先を占む
可憐隻影孤貧客　憐むべし、隻影孤貧の客
売却煎茶充飯銭　煎茶を売却し、飯銭に充つ

「我が身が老いて、つくづく自分の性格の鈍さを知る。古い知人は皆、先を行ってしまった。可哀そうな孤独な者、煎茶を売りながら食費に充てている。」

【大潮】

松風説破未生前　松風説破す、未生前
一碗纔通象帝先　一碗纔(わずか)に象帝の先を通ず
自是有人稱換舌　自ずから是れ換舌と称する人有り
醒来為擲杖頭銭　醒め来たり、杖頭銭を擲つ為り

「松風の様な釜の湯の音が、生まれる以前の世界を解き明かす。茶一碗で、天帝の先に通じることができる。これを舌が換わるようだ、と言う人がいた。目覚めたのは、茶代を払うためだ。」

第四首では、大潮は「前」、「先」、「銭」の韻を合わせている。

「松風」は茶釜の音。宋・蘇軾の「試院煎茶」では「蟹眼已過魚眼生、颼颼欲作松風鳴」とある。「説破」は打ち明けるの意味。「未生前」は禅語で、「父母未生前」とは父と母が生まれる前の本当の姿、一念すら起こらない無差別の心性という意味である。「纔通」はやっと通じるという意味で、道元（1200–1253年）[18]の「正法眼蔵」に「一法纔通万法通」とある。「象帝先」は「象帝之先」、『老子』四章に「吾不知誰子、象帝之先」があり、これは天帝よりも先の意味である。「杖頭銭」は、中国晋代の隠者阮脩（270–311年）[19]が、いつも杖の頭に百文の銭をかけて酒屋に寄っていたことにちなんでいる。『世説新語箋疏』の下巻上に「阮宣子常歩行、以百銭掛杖頭、至酒店、便独酣暢、雖当世貴盛、不肯詣也」とある。

前半では、「松風説破す未生前　一碗纔に通ず象帝の先」で、売茶翁の茶にこれ以上ない評価をしている。つまり、売茶翁の茶は、普通の茶ではなく、「未生前」と「象帝之先」のような人間本来あるべき姿を悟らせるお茶であるとしている。大潮の三句目「自ずから是れ換舌と称する人有り」から、売茶翁の茶の味は舌を換えるほどの味だと褒める人がいることが分かる。この点について、売茶翁は自分の詩の中で、茶の味について触れることはあまりなかった。この句はまさに売茶翁が売る茶の味の素晴らしさを証明したものである。

四句目の「杖頭銭」は阮脩の説話で『晋書』[20]巻四十九にその伝記が載っており、「脩、字宣子、好老易、云々、性簡任、不修人事、絶不喜見俗人、遇便舎去、云々、常歩行、以百銭掛杖頭、至酒店、便独酣暢、雖当世富貴而不肯顧、家無儋石之儲晏如也」とある。阮脩は、易の理に詳しく、老子の無為思想にも通じ、俗人に会うことを喜ばず、常に歩行するのに、百銭を杖頭に掛け、酒店に行けば思う存分酒を飲み、また生活を営むことに無関心で、家に蓄えはなかったようである。彼の世俗的な価値観を破った風変わりな生活振りは、どこか売茶翁と似ているように思われる。大潮は「醒め来たり、杖頭銭を擲つ為り」で、売茶翁の素晴らしい茶を飲み、目が覚めてから払う茶代は、普通の茶代ではなく、阮脩の「杖頭銭」のような脱俗的なものと同じだとしている。四首目の次韻を通じても、大潮が売茶翁の茶に対して深い理解を示しており、売茶翁の真の理解者であったことをうかがい知ることができる。

第五首

【売茶翁】

初心不改幾春秋　初心改めず、幾春秋
性癖風顛竟不休　性癖風顛、竟に休せず
紫陌紅塵謾盤礴　紫陌紅塵、謾りに盤礴
世波険処泛虚舟　世波険しき処、虚舟を泛ぶ

「初心を改めることなく、長い月日が経った。自分の変わった性格は相変わらずだ。世俗にみだりに居座り、世間の険しさに空の船を浮かべる。」

【大潮】

明月珠簾萬戸秋　明月珠簾、万戸の秋
此翁高臥夜方休　此の翁高臥し、夜まさに休す
朝来縦作山陰客　朝来、縦ひ山陰の客となるも
去住終同訪戴舟　去住、終に訪戴の舟に同じ

「月の美しい光が玉のすだれに照り映える都の秋。この翁（売茶翁）は俗世を離れ、夜が更けてやっと眠りについた。たとえ明朝早く起きて友を訪ねても、戴逵を訪ねた王徽之のように気ままにふるまうことでしょう。」

大潮は第五首では、「秋」、「休」、「舟」の韻を合わせている。

「珠簾」は玉で作られたすだれのこと。「萬戸」は「千家萬戸」と同じ、たくさんの家の意味から都を意味する。宋・道原の『景徳傳燈録』に、「師曰「長安城里」問「如何領會」師曰「千家萬戸」」とある。「此翁」はこの翁、売茶翁のことを指す。「高臥」は、その心を高尚にして世俗の煩わしさを避けて暮らすこと。『晋書』隠逸、陶潜傳では、「嘗言、夏月虚閑、高臥北窗之下、清風颯至、自謂、羲皇上人」とある。「山陰客」は、晋の王徽之のこと。王徽之は会稽山陰に住んでいたのはその由来である。唐・杜牧の詩「題劉秀才新竹」に「不是山陰客、何人愛此君」とある。「去住」は、去ることと留まること。漢・蔡琰の詩「胡笳十八拍」に「十有二拍兮哀樂均、去住兩情兮難具陳」とある。「訪戴舟」は、戴逵（326-396年）[21]を訪れる舟。王徽之（？-388年）[22]が雪の夜に、友人の戴逵を訪れる物語に喩えている。

一、二句目の「明月珠簾、万戸の秋、此の翁高臥し、夜はじめて休す」は、美しい秋の京都にいる売茶翁の姿が描かれているが、一方では「高臥」と売茶翁が隠遁している様子を想起させる表現である。三、四句目は、主に売茶翁を王徽之が雪の夜に、友人の戴逵を訪れる物語になぞらえている。この物語は『世説新語』[23]任誕にあり、「王子猷居山陰、夜大雪、眠覺、開室命酌酒、四望皎然、因起彷徨、詠左思招隠詩、忽憶戴安道、時戴在剡、即便夜乗小船就之、經宿方至、造門不前而返、人問其故、王曰、吾本乗興而行、興盡而返、何必見戴」とある。

これは王徽之が雪の夜に船に乗って、友人の戴逵を訪ねたが、興が尽きたということで、戴逵に会わず引き返した逸話[24]である。大潮は、世俗にいながらも世俗の価値観に縛られず、気ままに隠遁する売茶翁の風雅さを王徽之に喩え、売茶翁の隠遁生活を、真に風雅なものとして解釈し賞賛しているのである。

第六首

【売茶翁】

建溪絶品飾龍鳳　建溪絶品、龍鳳を飾る
換却舌頭價萬金　舌頭を換却すること價萬金
正向鳳凰城畔賞　まさに鳳凰の城畔に向って賞す
依然落節古猶今　依然として節を落ちること、古は猶お今の如し

「建溪の茶は絶品で龍鳳が飾られる。舌を取り替えるようで万金の価値がある。都を臨んで（抹茶を）味わうのも、昔も今も相変わらず節度を越えている。」

【大潮】

紫陌紅塵歳月深　紫陌の紅塵、歳月深し
春風楊柳又揺金　春風楊柳、また金を揺らす
賣茶生計長如此　売茶の生計、長く此の如し
何必桑滄變古今　何ぞ必ずしも桑滄古今の変にならんや

「俗世間に長く隠居し、また春風が吹いて、柳が芽生える季節になった。売茶で生計を立ててからこんなに長くなったが、どうして桑田が滄海に変わるような変化が必要であろうか。」

第六首では、大潮は「深」、「金」、「斤」の韻を合わせた。

「紫陌紅塵」は、売茶翁が第五首でも用いているように、俗塵のことで、売茶翁が俗世間に隠遁していることを指す。「歳月深」は年月が長いことを指し、つまりは売茶翁が隠遁してすでに長いことを示しているのである。「楊柳」はやなぎのこと。「揺金」は木が芽生える意味。宋・楊公遠の「野趣有声画」には「怪渠楊柳揺金未、底事漫空絮便飛」とある。「桑滄」は「桑田滄海」、桑田変じて滄海となる、世の中の移り変わりが激しいこと。『神仙傳』巻七に、「麻姑自説云「接待以来、已見東海三為桑田」」とある。「古今」は昔と今。『禮記』に「是百王之所同、古今

之所壹也」とある。

一、二句目の「紫陌の紅塵、歳月深し、春風楊柳、また金を揺らす」は、売茶翁が龍津寺を離れ、俗世界に入ってからすでに月日が長く経過し、春風で柳の木がまた芽生えて、再び新しい一年が来たという表現である。大潮がこの次韻を書いたのは春の季節であったのであろうか。また、大潮は売茶翁の売茶生活に対して、三句目で「売茶の生計、長く此の如し」と表現していることも興味深い。

また、四句目では「何ぞ必ずしも古今桑滄の変」と、売茶翁が六首目において用いた「古は猶お今の如し」という表現の「古今」の部分を活用し、売茶翁が今と昔で依然として変わらないと言ったことに対して、大潮は今と昔はそれほど変わるものではないと労わっているような様子が印象的である。

ここで触れておくと、資料が残されていないため、売茶翁がいつ龍津寺を離れたのかは明らかにはされていない。また従来、売茶翁が売茶生活を1735年に通仙亭の開業によって始まったとされるのが通説であった。しかし、大潮の次韻「和売茶口占　贈通仙亭主翁十二首」は、収録された『魯寮詩偈』の順番に従えば、1738年頃の作品であることが推測できる。つまり、1738年の「和売茶口占　贈通仙亭主翁十二首」を書かれるまで、一句目の「紫陌の紅塵、歳月深し」のように、売茶翁は龍津寺を離れて、俗世間で隠遁してから長い月日が経ったと推測できよう。さらに、大潮が描いた「売茶の生計、長く此の如し」からも、売茶翁が茶を売って生活した期間も非常に長いことがわかる。大潮の六首目は、売茶翁が龍津寺を大潮に托して、早い段階で龍津寺を離れ、そして、1735年、61歳以前にはすでに売茶生活を始めていたことの証左になるであろう。

第七首

【売茶翁】

自覚疎狂違世間　自ら疎狂を覚え、世間に違う
陸沈城市恣癡頑　城市に陸沈し、癡頑を恣にす
誰言形影唯相弔　誰が言う形影、唯相弔うと
十二先生伴我閑　十二先生、我が閑に伴う

「自分が常識外れと感じつつも、世間とは異なった存在となっている。街に隠遁し、好き勝手に頑なである。そんな私を誰が孤独だというのか、私には茶具たちが相手をしてくれている。」

【大潮】

遊蹤長寄市塵間　遊従　長く市塵の間に寄る
磊落偏同怪石頑　磊落　偏に怪石の頑なに同じ
儻値時人相借問　儻値　時人、相借問す
賣茶豈礙老僧閒　賣茶　豈に老僧の閒を礙（妨げる）

「長い間俗世間に遊歴の跡を残し、（売茶翁は）磊落して普通の人と違う。もし、人々が売茶翁について口々に騒いだとしても、茶を売ることが老僧（売茶翁）の悠然とした生活を邪魔することにはならないであろう。」

第七首では、大潮は「間」、「頑」、「閒」の韻に合わせた。

「市塵間」は市中の喧騒の中を意味する。「磊落」は、大きな石が無造作に転がることから、転じて型にはまらない、度量の大きさを意味する。『文心彫龍』時序に、「張蔡磊落、鴻儒之才不時乏。」とある。「怪石」とは、通常とは異なる形の石の意味であるが、玉に似た石のこととともある。『漢書』地理志上に「鉛松怪石」があり、注には「怪石、石之次玉美好者」とある。「時人」は、そのときの人、当時の人々。『後漢書』宋弘傳に「潁川荀爽、深以為美、時人亦服焉。」とある。「頑」は頑な、片意地で『国語』鄭語には「而近頑童窮固。」とあり、「頑童、童昏、固、陋也。」と注がある。「礙」はさまたぐ、とどめるの意味、『説文』に「礙、止也、从石疑聲。」とある。「閒」は「閑」と同じ。売茶翁の六首目では、「ひま、いとま」の意味で使ったが、ここでは、「くつろぐ、悠然としている」の意味である。『楚辞』宋玉、招魂では、「静閒安些」とある。その注に、「空寛曰閒」とある。

一句目の「遊従、長く市塵の間に寄る」は売茶翁が長い間、俗世間を遊歴していることを表している。これは、大潮自身の六首目の「紫陌の紅塵、歳月深し」と呼応して、売茶翁が俗世間に隠居してからすでに長い月日が経っている様子をうかがうことができる。二句目の「磊落、偏に怪石の頑なに同じ」は、売茶翁の人格に対して度量が大きく、玉に似た石の様だと賛美し、大潮の売茶翁に対する尊敬を感じさ

せる。大潮にとって売茶翁は少年時代から同門であり、それだけに売茶翁について深く理解していたのであろう。

また、三句目の「儻値　時人、相借問す」は、「もし人に（売茶翁のことを）聞かれたら」という意味であるが、この十二首を作詩した頃には、すで大潮のもとに売茶翁について尋ねる人が多くいたのであろうか、京都での売茶翁の風変わりな売茶行為が注目を集めていた様子を窺うことができる。最後の「賣茶豈に老僧閑を礙」は、売茶翁が七首目で「暇をしている（我閑）」と表現したことに対して、巧妙に「悠然としている」の「閒（＝閑）」の意味とし、茶を売ることはまさに売茶翁の悠然としている、本来の姿を現しているとしたのである。

第八首

【売茶翁】

行蔵自古且随縁	行蔵は古えより且（かりに）縁に随う
或宿孤峯或掣顚	或いは孤峰に宿し、或いは掣顚（せいてん）
道是煎茶接来往	道う是れ煎茶来往を接す
笑吾賣弄乞文銭	笑う、吾が売弄、文銭を乞うことを

「出処進退は古くから縁によるという。時には山頂に住み、時には風変わり。茶を煎じて往来する人をもてなすと言い、私が偉そうにお金を求めていることを笑え。」

【大潮】

誰道行蔵随世縁	誰かいう行蔵、世縁に随うと
百年長擅一狂顚	百年長く擅（ほしい）ままにす、一狂顚
除非十二先生業	除非す十二先生の業
世界三千不直銭	世界三千、銭に直（あた）らず

「出処進退は俗縁に随っているなどと誰が言ったのだろう。（売茶翁は）風顚をやり通して来た。茶を売ることを除くと、それ以外のすべてが何の価値もないのだ。」

第八首では、大潮は売茶翁の「縁」、「顚」、「銭」の韻に合わせた。

「世縁」は世の中のゆかりのこと。俗縁、塵縁のこと。唐・戴叔倫の「暉上人獨坐亭詩」に「去住渾無跡、青山謝世縁」とある。「百年」は百歳で、一生の喩え。「長擅」は「擅長」のことで、思うがままに技量を発揮すること。唐・王捧珪の「日賦」に「在七政雖擅其長、昭萬物不競其功」とある。「狂顚」は売茶翁の風顚のこと。「十二先生」は茶具のこと。売茶翁の七首目にも使われている。「十二先生業」は茶を売ることを指す。「世界三千」は「三千世界」のこと。仏教用語の「三千大世界」の略で、小千世界、中千世界、大千世界のこと。『釋氏要覧』に「此山（須彌山）有八山遶外、有大鐵圍山、周廻圍遶、并一日月晝夜回轉、照四天下、名一國土、積一千國、各小千世界、積千箇小界、名中千世界、積一千中世界、名大千世界、以三積千、故名三千大世界。」とある。「直銭」は「値銭」のことで値打ちがあるという意味。「不直銭」は、値打ちがない、価値がないという意味である。

第一句の「誰かいう行蔵、世縁に随うと」は、売茶翁の七首目の「行蔵は古えより且つ縁に随う」に対するものであり、「縁」に「世」を加えることによって、売茶翁の「行蔵」が世間一般的なものではなく、「世縁」といった俗縁や塵縁のような世俗的なものに縛られない素晴らしいものであることを巧妙に表した。続いて、第二句で「百年長く擅（ほしい）ままにす、一狂顚」は、先述のように、大潮はすでに売茶翁の風顚に対する思いをよく知っているので、その崇高な理念のもとで一貫した姿勢を見せてきたと、賞賛しているのである。

そして、売茶翁の「道う是れ煎茶来往を接す、笑う、吾が売弄、文銭を乞うことを」、「茶を売って小銭をもらっている」の表現に対して、大潮は「除非す十二先生の業、世界三千、銭に直（あた）らず」と、売茶翁の所業は世俗的な金銭の価値では推し量れないものだと「銭」についての解釈を次韻する中で、売茶翁の売茶行為をよく理解し、高めていることが印象的である。

第九首

【売茶翁】

遠覓霊苗入大唐	遠く霊苗を覓めて大唐に入り

持帰西老播扶桑　持ち帰って西老扶桑に播す
宇陽一味天然別　宇陽の一味、天然別なり
堪嘆時人論色香　嘆ずるに堪えたり、時人の色香を論ずるを

「はるばるお茶を求めて、中国に行き、持ち帰った栄西は日本に広めた。宇治茶の味は格別であるのに、人々が色や香りだけを求めるのは嘆かわしい。」

【大潮】

明慧何年入太唐　明慧何れの年か太唐に入りし
趙州今日在扶桑　趙州　今日扶桑に在り
茶亭自有通仙路　茶亭自ずから通仙の路有り
到日知誰穿鼻香　到らん日　知んぬ　誰か鼻を穿って香しき

「明恵上人がいつ中国に入ったか、趙州和尚が今、日本にいるかのようだ。茶店からは自然と仙境への道が通じており、鼻を穿つような茶の香りをかぐのは誰であろうか。」

第九首では、大潮は「唐」、「桑」、「香」の韻を合わせている。

「明慧」とは明恵上人のこと。華厳宗中興の祖、京都の栂尾で遁世生活などを送りつつ、栄西が中国から持ち帰った茶の種子を普及させたと言われる。「太唐」は大唐で中国のことを指す。「趙州」は趙州従諗、中国唐末の禅僧で語録の『趙州録』は公案として有名である。売茶翁は第三首でも趙州に言及している。「茶亭」は売茶翁の通仙亭のこと。「穿鼻」は鼻に穴をうがつことで、ここでは鼻を突き通すという意味。

売茶翁は第九首では、「宇陽の一味、天然別なり、嘆ずるに堪えたり、時人の色香を論ずるを」と、当時の人は茶の精神より、味と色のような表面ばかりのものを気にしていると嘆いた。これに対して大潮は、「明慧何れの年か太唐に入りし」とあるように、実際に明恵は、中国には行っていないはずなのに、いつの間に中国へ渡ったのか、さらに「趙州　今日扶桑に在り」とあるように、中国唐代の禅僧である趙州も、日本に来たはずはないのに、いつの間に来日したのか、と売茶翁を茶に由来する名僧達になぞらえ、売茶翁の茶こそが茶の精神を受け継いだものであるとした。確かに栄西の茶の精神は継承されていないかもしれないが、「茶亭自ずから通仙の路有り」とあるように、売茶翁の茶亭こそ天に通じ、売茶翁の茶を飲めば、天にも登り、神仙になれるほどの真の茶であると表現し、大潮の売茶翁に対する強い尊敬と期待の意が込められている。

第十首

【売茶翁】

瓦鼎翻波松籟發　瓦鼎に翻波、松籟発する
点来売與五湖人　点来売与す、五湖の人
奈何箇裡無知味　奈何ぞ、箇裡に味を知る無し
獨坐自煎絶等倫　独坐自煎し、等倫を絶する

「釜の中に波が起こり、松風の様な釜音が発し、その茶を世間の人に売り与える。この味をわかる人がいないのはどうしてだろうか。素晴らしいお茶を独りで煎じている。」

【大潮】

採得金芽不記春　採得金芽、春を記さず
當年誰是社中人　当年誰是れ社中の人
無端獨向長空嘯　端無く獨り長空に向かい嘯く
驚殺尋枝摘葉倫　尋枝摘葉の倫を驚殺し

「貴重な茶を摘み得て、長い年月が経ったが、当時は誰が仲間であったのであろうか。思わず独り空に向かって嘯いて、表面ばかり気にする輩を甚だ驚かせてしまう。」

第十首は、大潮は「人」、「倫」の韻を合わせた。

「金芽」とは、茶葉の意味であるが、特に珍しいものを示したものでもある。この表現は、『全唐詩』の僧皎然の「飲茶歌誚崔石使君」にも「越人遺我剡溪茗、採得金芽爨金鼎」と見られる。また、「不記春」は、長い年月が経った意味を表す。李白の「長門怨二首」の其二に見られる表現であり、「桂殿長愁不記春」とある。そして「社中」とは、仲間を示している。「無端」は、仕方なく、思わずという意味である。唐・楊巨源の「大堤曲」には「無端嫁與五陵少、離別煙波傷玉顔」とある。「長空」は大空のことで、唐・杜牧の「登楽遊原詩」に、「長空澹澹孤鳥没、萬古銷沈向此中」とある。「驚殺」は大いに驚く。「尋枝摘葉」とは、表面ばかり気にすることを意味し、宋・

嚴羽「滄浪詩話・詩評」には、「建安之作全在氣象、不可尋枝摘葉」とある。「倫」はたぐい、類のことで、『説文』に「倫、輩也、从人侖聲。」と解釈がある。

第十首で売茶翁は、お茶を点てて人々に売ろうとするが、自分の茶を分かってくれる人がいないと表現している。これに対して一、二句で大潮は「採得金芽、春を記さず、当年誰是れ社中の人」と、長い月日の中、同じ志を持っている人は誰だったのであろうと、売茶翁と同様に残念だという口調をとった。売茶翁の「奈何ぞ、箇裡に味を知る無し、独坐自煎し、等倫を絶する」のように、一人で茶を沸かしていると表現しているのに対して、大潮は売茶翁が一人で茶を沸かしていても、その真の茶こそが、「端無く獨り長空に向かい嘯く」と独り空に向かって嘯いているように、（茶の味や色のような）表面ばかり重視する「尋枝摘葉倫」のような人たちを驚かせて、目を覚ませてあげるのだと絶賛し、売茶翁を励ましているようにも感じられるのである。

第十一首

【売茶翁】

五台拈起玻璨盞　五台、玻璨盞（はりさん）を拈起す
塞断口門味太奇　口門を塞断し、味太だ奇なり
莫道南方無這箇　道（い）う莫かれ、南方這箇無し
通仙亭上也無虧　通仙亭上も、虧ける無し

「五台山でガラスの杯を取り上げると、口を塞ぐほどに味が素晴らしい。南の方にはこのような物がないと言わないでくれ、通仙亭では欠かすことはないのだから。」

【大潮】

賣茶長住大河湄　売茶、大河の湄に長く住む
客至誰能不嘆奇　客至りて誰が能く奇と嘆ぜん
況復玻璨南國盞　況や復た玻璨　南国の盞
拈來此地也無虧　拈來　此地も虧（か）ける無きなり

「売茶翁は川のほとりに長く住んでいる、客が来たら誰もが珍しいと感心する。ましてやガラスの杯を取り上げると、この土地にも欠けるものが無いことがわかる。」

大潮の第十一首の次韻では、「奇」、「虧」の韻を合わせた。

「長住」は長くいること。「大河湄」は大きな川のほとり、ここでは鴨川のこと。「玻璨」、「盞」、「拈來」、「無虧」は、売茶翁が十一首で使っている。

第一句は、「売茶、大河の湄に長く住む」と表現しており、売茶翁が川のほとりに長く住み、客を待っているということから、売茶を営んでいたことがわかる。同時に、鴨川の畔の通仙亭以前にも、どこかの川沿いで水を汲みながら茶を売っていた様子がうかがえる。これも、売茶翁の第五首の「初心改めず、幾春秋」や大潮の第六首「紫陌の紅塵、歳月深し」と同様に、売茶翁は京都東山に「通仙亭」という茶店を開いて売茶生活を始めたとすれば、その三年以内に売茶翁と大潮が作詩したものとしては、あまりに表現に不自然であり、売茶翁は通仙亭開業以前から、すでに茶を売っていた可能性が高いと考えられる。

第二句の「客至りて誰が能く奇と嘆ぜん」は、売茶翁の変わった売茶の風景に感心したという。売茶翁について、『近世畸人伝』でも「凡春は花によしあり、秋は紅葉にをかしき所をもとめて、自茶具を荷ひて至り、席をまうけて客を待。洛下風流の徒よろこびてそこにつどふ。さればいくほどなく、売茶翁の名あまねく世に聞ゆ。」とあるように、京都で茶を売り始めて間もなく、文人に注目されるようになったとあるが、第二句からもその様子をうかがうことができる。

第三、四句の「況や復た玻璨　南国の盞、拈來此地も虧（か）ける無きなり」は、文殊菩薩が無著に出したような珍しいお茶は、売茶翁の茶亭でも飲めると表現している。これは売茶翁の茶が、京都の文人達に受け入れられた理由を売茶翁の十一首で使われたストーリを借りて、巧妙に説明を加えたものであろう。

第十二首

【売茶翁】

堋口路頭千古趣　堋口（ほうこう）路頭、千古の趣
清香万里没邊春　清香万里、没辺の春
無端随分開舗席　端無く分に随い舗席を開く
是我由来待賈人　是れ我れ由来賈を待つ人

「土手の道には昔の趣があり、良い香りがはるか遠

くまで広がっている。絶えず気ままに店を開いているが、私はそもそも買い手を待っているのだ。」

【大潮】

瓦鼎松風日日新　瓦鼎松風、日日新たなり
天香吹満百花春　天香吹き満つる、百花の春
非因来換娘生舌　来たって娘生の舌を換うるに因るに非ずんば
誰作趙翁屋裏人　誰か趙翁屋裏の人とならん

「茶釜から松風の様なお湯の湧く音が、毎日新しい。茶の香りに満たされる花々が咲く春。ここに来て、生まれつきの舌を取り換えられるほどの茶を味わうことがなければ、誰が趙州和尚の流れをくむ人になれるだろう。」

十二首では、大潮は「春」、「人」の韻を合わせている。

「瓦鼎」は売茶翁の第十首にも使われており、茶釜のこと。「松風」は大潮の四首目にもあり、茶釜の音の意味。「日日新」は毎日新しい意。『礼記・大学』に「苟日新、日々新、又日新」とある。「天香」はいい香り、ここでは茶の香りを表す。「百花」は種々の花、多くの花。「百花春」は、多くの花が咲く春の意味。「趙翁」は趙州のこと、「屋裏人」は禅語、同門、同流儀の人。「趙翁屋裏人」は趙州と同流儀の人の意味である。

十二首の締めくくりとなるこの詩では、売茶翁はまず京都にあふれる「千古の趣」を説き、大潮はそれに対して「瓦鼎松風」から導かれる喫茶という行為に「日日新」という「千古」に対応する表現をあてている。大潮の『魯寮詩偈』の内容から、「和売茶口占　贈通仙亭主翁十二首」は1738年の春に作られたもので、売茶翁の十二首の「清香万里没辺春」に対して、大潮は「天香吹満百花春」と韻を合わせていることからも、「売茶口占十二首」は春に作られたと推定できるであろう。

売茶翁の「端無く分に随い舗席を開く、是れ我れ由来賈を待つ」、自分の茶を理解できる人を待っているという表現に対して大潮は、「来たって娘生の舌を換うるに因るに非ずんば、誰か趙翁屋裏の人とならん」と、舌を取り換えてしまうくらいの売茶翁のお茶を味わうのだけでなく、趙州の説く茶禅一如の境地を味わえるだろうと、売茶翁の茶は悟りの為の存在だと強調しているのである。大潮は、まさに売茶翁が待っている自分の茶の真意を分かる人物であったと言えるだろう。

おわりに

以上、本稿では売茶翁の交友関係においてとりわけ重要な存在と思われる大潮との交友に注目し、龍津寺の住職、「送賣茶翁再游洛序」、「和売茶口占　贈通仙亭主翁十二首」に注目し考察してみた。これらから両者の関係性や、売茶翁の人間像、売茶の精神について理解できることが多数あった。とりわけ今回取り上げた「送賣茶翁再游洛序」の詳しい考察や「売茶口占十二首」と、それに次韻した大潮の詩との対比を通しての考察は、これまで行われなかったものであるが、この取り組みにより大潮の売茶翁に対する理解度や思いの深さ、売茶翁の活動に対する大潮の役割について改めて認識することができた。

大潮は同門の兄弟子である売茶翁に対して尊敬の念だけでなく、売茶翁の精神性にも強い憧憬を抱いていた。こうした背景には、大潮が売茶翁と同じ肥前国（現在の佐賀県）の出身であっただけでなく、幼少の頃より同じ禅師のもとで修行した仲であったことが深く関係している。当時の両者の関係を明確に示すものは少ないが、売茶翁が幼少より注目に値する言動をとり、住職の席も任されかけたことなどについて、大潮は詩『松浦夜泊　夢月海兄』の中でも「海子同門最　襟期自不群　曾従師席晤　忽向帝都分　石上題明月　毫頭落彩雲　夢回松浦月　宛在水之濱」とあり、月海は同門の中でも最も素晴らしく、その志は普通の人と群れることはなかったと売茶翁を評しており、一目置いていたことが読み取れる。さらに、売茶翁が大潮を龍津寺の後継者とする為に再三連絡をとり、大潮もそれを受けて帰国していることからも、売茶翁の大潮に対する影響力の強さがうかがえよう。

また、「和売茶口占　贈通仙亭主翁十二首」を通じて考察したが、大潮は売茶翁が活動を始めた当初から、売茶翁の茶に対する深い理解者であった。このことから推測できることは、売茶翁が京都で活動する以前か、あるいは活動して間もない時期には、すでに一定の精神性が確立されており、その頃から大潮にも理解できるように示していたということであ

る。売茶翁の煎茶精神は決して単純なものでなく、ある種の禅問答の様な点もある。それを大潮はまさに「打てば響く」様に、「知音」の逸話のように伯牙の琴を鐘子期が解するように、売茶翁の精神を理解していたことは、単なる同門の僧として以上の深い信頼関係によるものであったと考えられる。さらに一歩進めるならば、そのような売茶翁の精神の自由闊達さに対する憧れが、大潮自身も後に寺から離れることとなった理由の一つであったのかもしれない。

本稿は、2015年に長崎大学に提出した博士論文の一部に加筆したものである。

（注）

1　現在の佐賀県佐賀市蓮池町、佐賀鍋島藩の支藩として蓮池鍋島藩が置かれた。

2　黄檗宗、江戸時代に中国明代の福建省から日本に招聘された、中国臨済宗の隠元隆琦（1592-1673年）を開祖とする宗派であり、当時の江戸では禅宗の一派とされた。隠元は、数十名の弟子と渡来すると共に、明代の禅のみでなく、当時中国の文人の間で好まれた文人趣味も多くもたらしたとされるが、その中に煎茶も含まれていた。

3　化霖道龍（1634-1720年）、黄檗山の第四代住持であった濁湛性瑩の弟子。

4　中国唐代、盧仝（？-835年）『七碗茶歌』に「六碗通仙霊」（六碗飲めば仙界へ通じる）とあるのが、通仙亭の由来と思われる。

5　大潮は1678年に生まれたという説もある。（川頭芳雄『佐賀県立郷土史物語第一輯　脊振山と栄西；大潮と売茶翁』）

6　大典顕常：江戸中・後期の文人僧。号は梅荘、大典、東湖山人、不生主人など。顕常は諱。近江の人で、始め黄檗に入り、のち相国寺に転じて僧となる。儒学を宇野士新に、詩文を大潮に学んだ。

7　大典による売茶翁についての初めての伝記である。『賣茶翁偈語』（1763年）にも編纂、出版されているが、後に修正されて、大典による『小雲棲稿』にも収録されている。

8　鏡宗：化霖の最初の弟子で、化霖が引退した後、龍津寺の住職となった人物。

9　谷村為海『高遊外売茶翁』出版社不詳　1981年　P454-455

10　末木文美士・堀川貴司『江戸漢詩選第五巻　僧門』岩波書店　1996年　P314-315

11　大潮元皓『西溟餘稿』「巻之二」1748年　P26

12　石鞏に参禅した三平（義忠禅師）との逸話は「石鞏張弓」「三平開胸」として知られる。

13　金谷治訳注『荘子 第一冊内篇』岩波書店　1971年　P24

14　同上

15　末木文美士・堀川貴司『江戸漢詩選第五巻　僧門』岩波書店　1996年　P32、P49

16　朱子『論語集注』が「程子曰く」として引いている。

17　吉川幸次郎「読書の学」、『吉川幸次郎全集』第25巻　筑摩書房　1986年　P303-307

18　道元：鎌倉時代初期の禅僧。日本における曹洞宗の開祖。

19　阮脩：字は宣子、鴻臚卿の次官である鴻臚丞となった。

20　中国晋朝について書かれた歴史書、二十四史の一つ。唐太宗の命により、房玄齢・李延寿らによって編纂された。

21　戴逵：字は安道、東晋時代の文人、再三の任用を受けず、隠遁生活を送った。

22　王徽之：字は子猷、王羲之の子、山陰に隠居し、職位は黄門侍郎になった。

23　『世説新語』は、中国南北朝・宋の劉義慶によって編纂された後漢末から東晋までの著名人の逸話を集めた小説集である。

24　「剡渓訪戴」「王子猷訪戴」「雪夜訪戴」などとして山水画の画題ともなっている。